

群馬県の古墳出土鉄鏃について

— 前期～中期中頃の鉄鏃 —

杉 山 秀 宏

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1. はじめに

3. 編年的位置づけ

2. 各古墳出土鉄鏃の概要

4. まとめ

— 要 旨 —

群馬県における古墳出土鉄鏃の編年を行うものである。かつて日本全体の古墳時代全体の編年や地域性について述べたことがあり、県内の鉄鏃についても一度まとめたことがある。今回は資料の再検討に伴い、再度群馬県内の古墳出土鉄鏃の前期から中期中頃にかけての資料を取り扱うことにした。具体的には、10古墳の鉄鏃を取り上げ、その実測図を提示し、その鏃について個々に説明すると共に、同時期の他地域の古墳出土鉄鏃のうち、県内出土鉄鏃と類似した鉄鏃を取り上げて比較した。また、出土状況について簡単に記した。県内外の鉄鏃の比較を通して、それぞれの古墳出土鉄鏃を編年した。

キーワード

対象時代 古墳時代

対象地域 群馬県

研究対象 鉄鏃

1. はじめに

古墳時代の鉄鍬については全般的なものは、20年以上前にまとめ（杉山1988）、群馬県内出土の鉄鍬については、15年前にまとめたことがあった（杉山1995）。その後、いくつかの鉄鍬について個々に記述することがあったが、今回再度、群馬県内の鉄鍬全般について取り上げることにした。鉄鍬の分類方法については現在全面的な改訂を行っている所であり、前稿で記した分類方法は今回取りあえず使用せず、改訂後に体系的な分類に基づいた呼称を付けるつもりである。

今回は紙数の関係から、古墳時代の鉄鍬の中でも、前期から中期中頃（4世紀～5世紀中頃）を対象にして、図を提示し、同時期の鉄鍬の類例や副葬位置なども含めて検討して、その時期的位置づけを行うものである。

2. 各古墳出土鉄鍬の概要

① 前橋天神山古墳（前橋市）（図1-1～11）（松島1968・1981、前橋市教委1970）

鉄鍬は、典型的な柳葉鍬（図1-1）が34本出土している。大きさは3.5～4cmと小型で、厚みのあるものである。ほぼ同形同大のものがまとめて出土している。断面菱形の両鑄造で、やや内湾する形態の刃部を有している。鍬の尻部がやや明瞭さを欠いているが、茎には、樹皮が巻いてあり、茎の断面ははっきりしない。奈良県桜井茶臼山古墳例（図5-1）に大きさ・形態や造りが近いものがある。

無茎鍬群の方頭三角形鍬と圭頭三角形鍬が特徴的である。方頭三角形鍬（1本以上）（図1-3）は、方形の頭部に、三角形の脚部を持ち、そこに一孔を有しているものである。木質が付着していることから、ここに矢柄を装着したものであることが分かる。三角形部にも刃を有する可能性高い。類例としては、奈良県東大寺山古墳例（図5-6・7）・静岡県堂山古墳例（図5-4・5）がある。いずれも薄手の方頭部を持ち、三角形の脚部に木質が付着して矢柄を装着したことが分かる。

圭頭三角形鍬（2本以上）（図1-2）は、平造に近い薄手の圭頭刃部から斜めに内湾するように側線を描いて下の三角形の脚部に至る形態を有するもので、三角形部には木質が付着していることから、先ほどの方頭鍬と同じように、この部分に矢柄の先を挟み込むように装着している。また、刃部を有する。圭頭部・三角形部中央には一孔がある。堂山古墳例（図5-2・3）から類例が出土している。先ほど述べた方頭三角形鍬とともに天神山古墳の時期を比定する根拠として重要なものである。

圭頭鍬（4本以上）（図1-11）が出土しており、圭頭部のみ刃があるもので、下の鍬身部である逆三角形部には刃は無い。鍬身部の段差は明瞭ではないが、段差がある可能性が高い。福岡県一貴山銚子塚古墳（図5-8・9）や大阪府紫金山古墳（図5-10）から出土したもの

と類似しているもので、大型の圭頭鍬系の初現形態と言えるもので貴重なものである。

多様な無茎・短茎腸挟三角形鍬群（30本以上）（図1-4～10）が出土している。逆刺の深いものや、浅いものや細長いものなど多様な形態がある。これらの多様な形態の鍬は、前期の後半に特に多く類例があり、これも時期を比定する一つの根拠となる。

なお、銅鍬は、柳葉鍬であるが、一文字鑄と十文字鑄のものが共伴している。その形態から見ると奈良県メスリ山古墳出土のものに近い（杉山2008）

出土状況であるが、鉄鍬は78本、銅鍬は30本出土しており、うち大部分は柳葉鍬である。基本的に棺内に収められていたと考えられる。柳葉鍬は頭部上位の所に37本まとめて切先を東にして出土したと考えられる。靱の痕跡が鍬下部に残り、靱の中に収められていたと考えられる。

その他の少数の鍬群は、やはり頭部上位のところに8本、体部右側部に3本以上、足部下位の銅鍬の上部に数本の鍬があった可能性がある。銅鍬は、足部下位の所に、切先を西に向けて靱の中に入れて30本がまとめて副葬されている。靱は3個体あったとの報告があるが、もう一つの靱の位置は、はっきりしない。体を中心にして、頭部上・体側部・足部下と数カ所に銅・鉄鍬を副葬していることが分かる。このような副葬方式は東国の古墳の中での大規模・大量副葬古墳の一つの典型例として良いであろう。

② 朝倉Ⅱ号古墳（前橋市）（図1-12・13）（山本1953・1981）

少し幅広く又は長身化した形態の柳葉鍬が20本出土している。長さは7～8cm、幅は2.1～2.8cmを有し、側線は内湾せずにほぼ直線状を呈する。厚みは0.2cmと薄い両丸造の断面である。鍬身関は、斜めに少し内湾するような形である。全体的に厚みが減じて、幅がやや広くなり、細長くなっていることを示している。これらは、この鍬が柳葉鍬の中では形態的に時期的に下る特徴を示している。類例としては、少し朝倉例より鍬身長が短い静岡県三池平古墳例（図5-12）や反対にやや長めの静岡県松林山古墳例（図5-15・16）がある。副葬位置は、棺内の足部下位に20本まとめて出土している。近くに農工具の鉄斧1・鉄鎌1がまとめて出土している。中型円墳の副葬品の埋葬例の一つのあり方を示すものである。

③ 軍配山古墳（玉村町）（図1-14～22）（後藤1937）

やや幅広の柳葉鍬と、腸挟三角形鍬及び圭頭鍬の中で、前期に特有な定角系の鍬が出土している。

幅広の柳葉鍬（図1-22）は朝倉Ⅱ号墳例に比べて、長5.4cm・幅2.2cmと少し寸がつまりあまり長身化していないのが特徴で、断面は両丸造りである。類例として

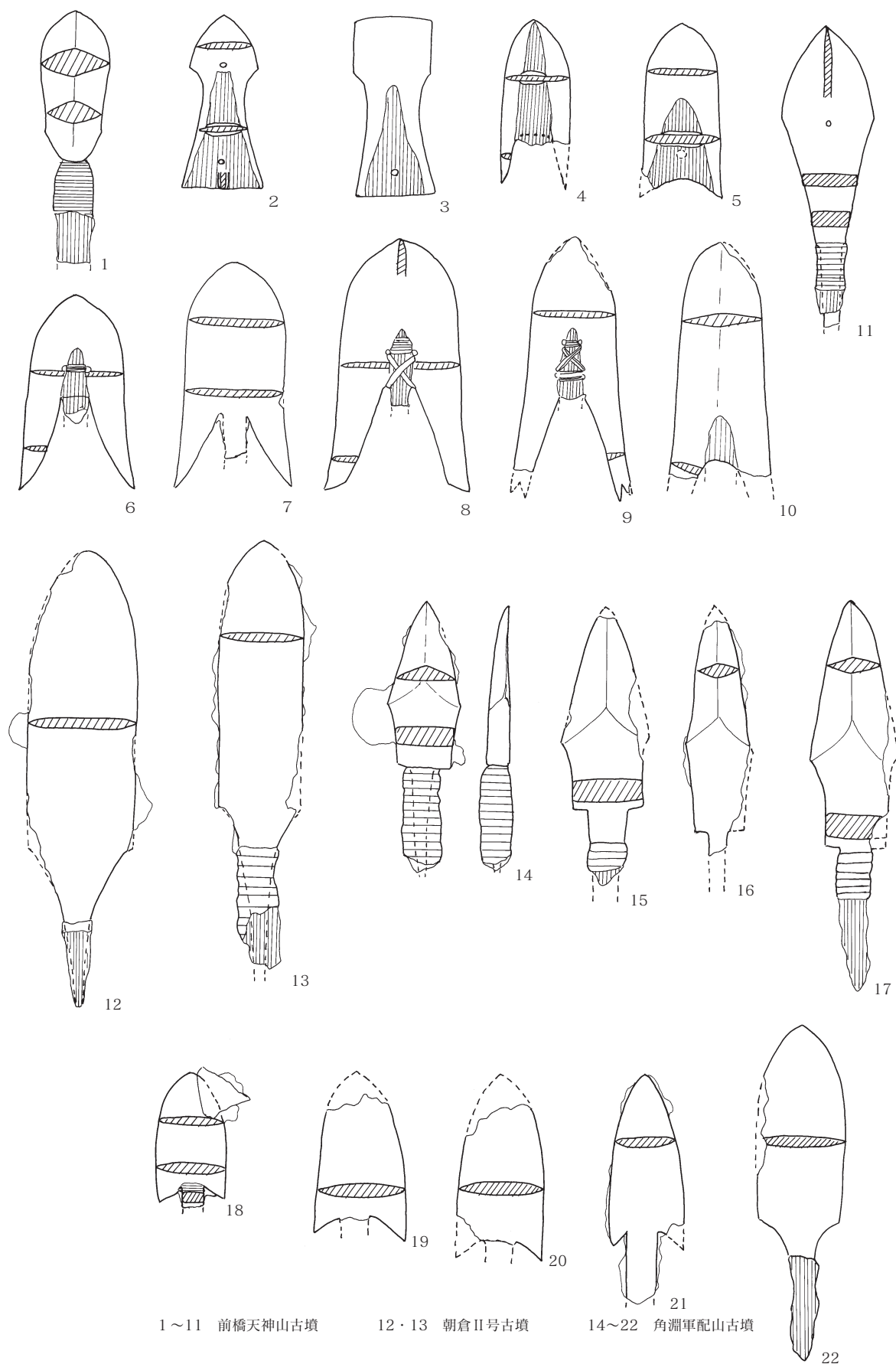


図1 群馬県内古墳出土前・中期中頃の鉄鏃 (1) S=2/3

は、奈良県橿山古墳例（図5-19）・三池平古墳例（図5-12）などがある。

腸袂三角形鏃（図1-18～21）は長3.6～4.8cm、幅2.0～2.4cmと寸詰まりで、逆刺もあまり深く持たない鏃で、刃部断面は両丸造りである。頸部は無い可能性が高いが、頸部があるものとすれば、奈良県池ノ内7号古墳例（図5-17・18）例・三池平古墳（図5-11・13）大阪府真名井古墳例などがあげられる。

圭頭鏃に含まれる定角系の鏃（図1-14～17）は、鏃身長5.2～6.6cm、幅1.8～2.2cmと長身化している。両鑄と片鑄の可能性のあるものがあり、刃があまり外湾して拡がらないものである。樹皮が茎に巻いてあるものが3点ある。奈良県橿山古墳例（図5-20・21）に近い。また、片鑄であるが、三池平古墳例（図5-14）なども近い例である。

出土状況は、粘土槨の内部から出土したものと想定されるが、開壟による偶然の発見のため詳しい状況は不明である。

④ 片山1号古墳（高崎市）（図2-1～3）（茂木2004）

小型の圭頭鏃の定角系鏃が1本、同じく小型の片刃鏃が2本ある。定角系鏃（図2-1）は鏃身長1.95cm・刃部幅1.15cm・刃厚0.2cmで刃部断面平造に近い両丸造りである。極めて薄手で小さく、集落から出土するような系統の鏃と考えるか、雛形品の可能性も考えておきたい鏃である。

片刃鏃（図2-2・3）は頸部を持っている可能性が高く、長頸鏃のうち、短い頸部を持つ系統の短頸鏃の可能性もある。ただ、鏃がひどくはつきりとは確認できない。頸部の長さも途中から欠損しているため確認できない。

短頸片刃鏃もこの小型のものに比肩するものは無く、やや大きめのものが、後述する赤堀茶臼山古墳例（図2-17・18）・静岡県金塚古墳例（図8-6）がある。逆刺を持つ片刃鏃としては、堂山古墳例（図6-14）がある。

出土状況は、定角系の鏃が粘土槨の足位にあたる西端から櫛と一緒に出てきている。装身具と共伴する例は珍しい。短頸系の片刃鏃は頭位の上部の石製模造品や短剣・鎌などと共に出土している。

⑤ 達磨山古墳（伊勢崎市）A・B号石室（図2-4～10）（尾崎1951・1981）

A号石室からは、16本出土した（図2-9・10）。

鏃がひどい状態で、はっきり形が分かるのは、長頸鏃のうちでも初めのうちに現れる、やや短めの頸部を持つ短頸系の長三角形鏃（図2-10）である。鏃身長3.0cm、刃部長2.7cm、刃部幅1.0cmで、頸部長3.2cmである。類例としては、後に述べる赤堀茶臼山古墳例（図2-14・15）や、奈良県兵家6号墳例（図7-13～15）・同

12号墳例（図7-7・8）、岡山県旗振台古墳（図7-16～18）、静岡県千人塚古墳例（図6-20～22）、静岡県神明社上古墳（図7-4・5）、堂山古墳例（図6-13）、千葉県小川台1号古墳例（図8-4）などがある。

もう1種類は、可能性としては、長身・細身化した柳葉鏃の鏃身部と考えられるが、鏃がひどく今一つ確認は難しい。残存鏃身長は5.4cm、鏃身幅1.1cmである

出土状況は、長3.9mもある北東から南西に伸びる竪穴系の石室の北半のほうに集中して出土しており、鉄鏃もこの箇所にあったとして良い。頭位の上部にあったものであろう。

B号石室からは、A号石室の鏃とは異なる組成の鏃の一群が38本出土している。（図2-4～8）

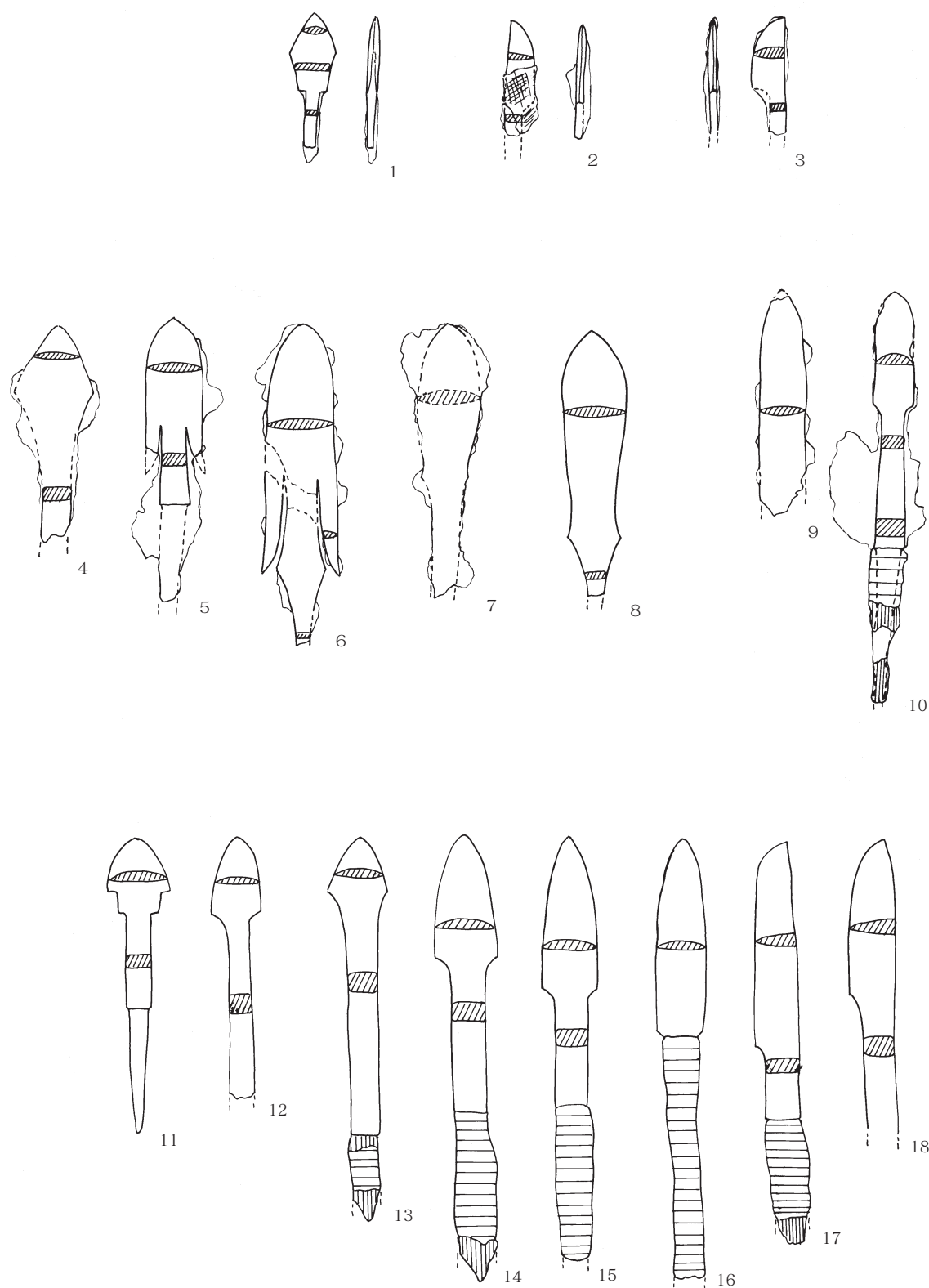
逆刺の深い鏃身長6.0cm、幅1.9cmの腸袂柳葉鏃（図2-6）がある。類例としては東京都野毛大塚古墳第3主体部例（図6-5）がある。また、長身化して山形の鏃身関をもつ、鏃身長5.0cm、鏃身幅1.5cmの柳葉鏃（図2-7・8）がある。類例としては、奈良県斑鳩大塚古墳例（図6-1）、大阪府黄金塚古墳東櫛例（図6-2）、岡山県金蔵山古墳例などがある。前期末～中期初頭の典型的な鏃である。逆刺を持つ腸袂三角形鏃（図2-5）がある。鏃身長4.5cm、刃部長3.8cm・刃幅1.4cmある。類例としては、野毛大塚古墳第3主体部例（図6-4）などがある。また圭頭系鏃かとも思われる鏃（図2-4）が出土しているが、鏃がひどくはつきりしない。

出土状況は、北東から南西方向にA号石室と並行に位置する長さ2.8mの竪穴系の石室の南半からまとまって出土した。足位に置かれたものであろう。ただし、北半は攪乱されており、鉄鏃2本もその攪乱の中から出土しているので、頭位上部にも置かれたあった可能性が高い。

⑥ 赤堀茶臼山古墳（伊勢崎市）（図2-11～18）（後藤1932）

短い頸部を持つ一群の鏃が9本出土している。三角形・長三角形・片刃といった頭部を持つ鏃で、この時期を代表する一群となるであろう。頸部は、三角形のものは長2.2～5.4cmと長短がある。三角形鏃で有段のもの（図2-11）があり、これは黄金塚古墳西櫛例や安光寺2号古墳（図6-8・9）例や、堂山古墳例（図6-11）、兵家12号古墳例（図7-9・10）などがある。三角形鏃（図2-12・13）は神明社上古墳例（図7-2・3）、長三角形鏃（図2-14・15）は達磨山古墳A号石室例（図2-10）例を初めとして、達磨山の類例にあげたたくさん例がある。片刃鏃（図2-17・18）は、金塚古墳例（図8-6）と近く、それらとほぼ同時期と考えてよいであろう。

出土状況は東西方向に延びる木炭槨の1号槨（長7.6m）の東端より出土している。頭位の上部に位置すると



1～3 片山1号古墳
4～8 達磨山古墳B号石室
9・10 達磨山古墳A号石室
11～18 赤堀茶臼山古墳

図2 群馬県内古墳出土土前・中期中頃の鉄鏃 (2) S=2/3

ころに配置したものである。

⑦ 十二天古墳（藤岡市）（図3-1～6）（志村1989）

11本以上の鉄鍬が出土している。圭頭系の鍬（図3-6）は、全長6cm、刃部長1cmで、圭頭部があまり大きくなくて、鍬身関も段が無いと考えられるもので1本出土している。類例としては、千葉県小川台1号墳（図8-3）例があり、段の有るものとしては静岡県金塚古墳（図8-5）例が出土しているが、九州地域に多く出土しているもので地域性のあるものである。東日本では極めて出土例が少なく貴重な例である。

長頸鍬の初現形の短頸系の長三角形の鍬（図3-1～3）が出ており、鍬身長2.8～3.4cm、頸部長3.6～4.0cm以上で、多少長短がある。達磨山古墳B号石室例や（図2-10）やその際にあげた、兵家12号古墳例などが近い。短茎の腸挟長三角形鍬（図3-5）も1本出土しており、逆刺が深い。奈良県五条猫塚古墳例や、千人塚古墳例（図6-16）などがある。また、柳葉で測線が直線状の刃部長6.6cmの長身化したものも含まれる。類例としては、長野県鋸塚古墳例などがある。

⑧ 蕨手塚古墳（伊勢崎市）例（図3-7～9）（尾崎1953・1981）

鉄鍬は11本出土している。短頸腸挟長三角形鍬で、刃部長2.3～3.6cm、頸部長5.2～5.6cmで約8g程である。この頸部の長さを持つ類例は、静岡県千人塚古墳例（図6-20～22）などがある。

蕨手塚古墳からは3つの主体部が墳頂部から検出されたが、副葬品を有するのはAの礫櫛で、北東方向に長さ約4m、幅1.2mあり、その中に長3.4m、幅約50cmの棺が置かれていた。他の副葬品とは異なり、鉄鍬11本は礫櫛の東北部分の上面から検出されていて、櫛外遺物である。

⑨ 長瀨西古墳（高崎市）例（図3-10～15）（後藤1937・黒田2005）

二段逆刺柳葉鍬（図3-10）が1本出土しており、関東地方では珍しい例である。今の所、関東では、長瀨西古墳例も含めて2例である。関東以外の類例として、兵家12号墳例（図7-6）などがある。主に近畿と南九州に多く出土する鍬である。

頸部が11cmと完全な長頸鍬である腸挟長三角形鍬（図3-11・12）が共伴しており、類例としては、宮山古墳第3号主体部例（図8-9）や、長野県一時坂古墳（図8-7・8）例などがある。短い頸部を段々と発達させた系統と異なる、長身化した頸部が完成された形で入ってきた長頸鍬の例として捉えることができる。

開墾により出土したもので、出土状況は不明である。

⑩ 鶴山古墳（太田市）例（図4-1～13）（尾崎1951・右島1989）

総数82本が出土している。そのうち、注目すべきは、

頸部が7～9cmと長い完成された形で入ってきた長頸鍬でしかも圭頭という極めて珍しい系統の鍬（図4-3～5）が出土している。類例は、宮山古墳第2主体部例（図8-10・11）があるがそれ以外ほとんど類例を知らないものである。長頸の長三角形鍬（図4-8～11）は、頸部が短いものから長いものまで3.7～9cmといくつかの鍬が出土している。また、鍬がひどく不明瞭であるが、片方にのみ逆刺を持つ鍬（図4-6・7）が出土している。頸部長が9～10cmの完成された長頸鍬である。確認できた本数は7本である。これと同じ鍬身形態で頸部が短いものが野毛大塚古墳第3主体部例（図6-6）などで類例があるが、頸部が9cmになる長頸の鍬は類例が無い。片刃で二段の逆刺を持つ長身化した鍬（図4-12・13）が10本出土している。宮崎県から同じような類例が出土しているのみで、貴重な例である。短茎の腸挟長三角形鍬（図4-1・2）が5点出土しており、観察した限りでは重執りではないと思われる。十二天古墳例（図3-5）や千葉県金塚古墳例（図8-1・2）がある。

鉄鍬は、竪穴式の石室内と石室外に大きく2ヶ所に分かれて置かれていた。石室内には、13点の鉄鍬が出土した。短茎腸挟長三角形鍬と片二段逆刺片刃鍬である。

石室外には南側と北側に分かれて置かれていた。北側では鉄鍬4束を掘り出したとのことで、南側から出た鉄鍬についての数量・形式は不明であるが、総数79点が石室外より出土した。いずれも長頸鍬と考えられる。

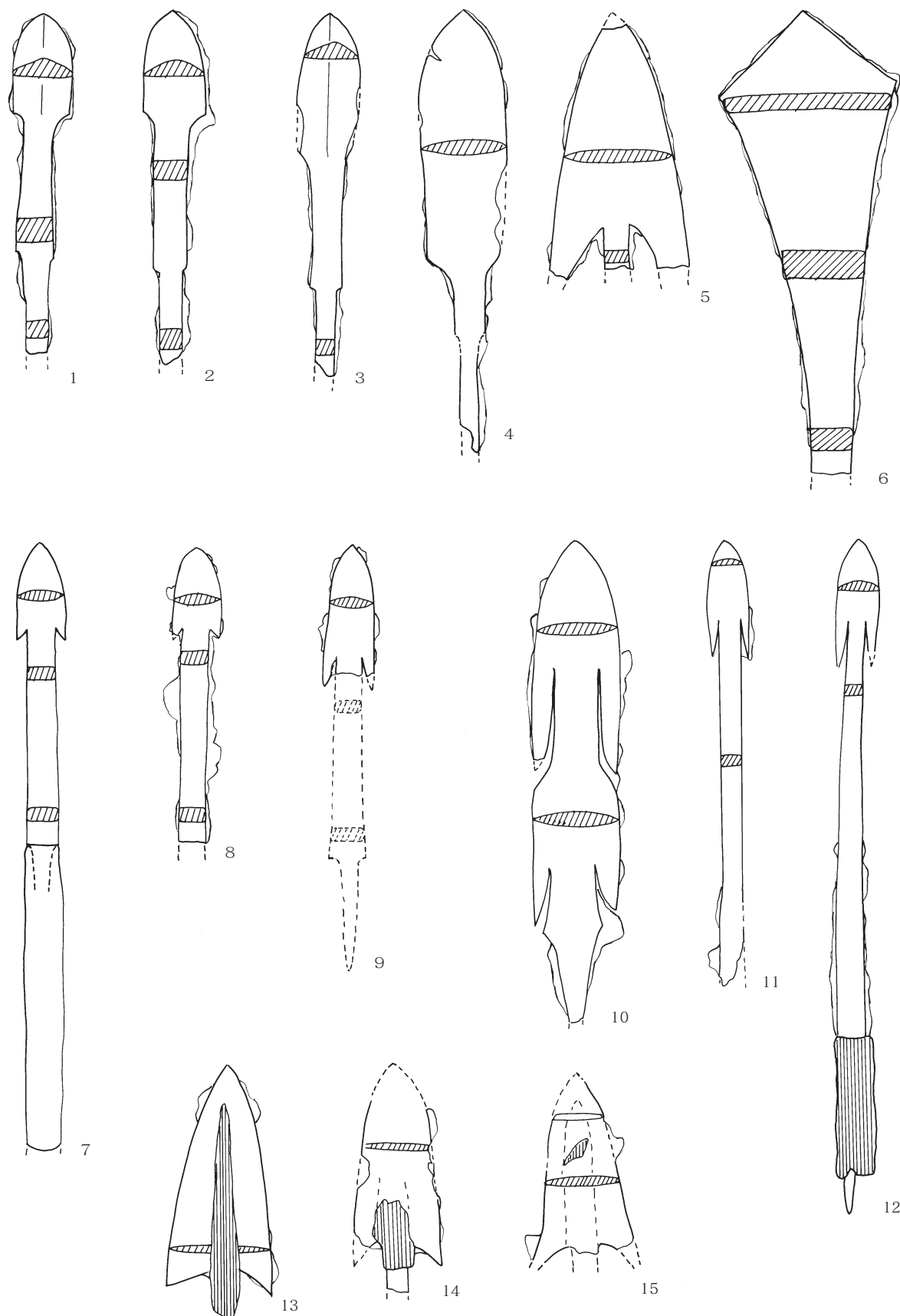
3. 編年的位置づけ

以上、前期から中期中頃までの鉄鍬について見てきた。ここで、種類ごとの鍬群の編年（図9）とそれを基にした古墳出土鉄鍬の編年を組んでみる。

県内出土鍬は柳葉鍬・腸挟柳葉鍬・圭頭鍬・無茎短茎鍬・長頸鍬・片刃鍬の一群がある。

柳葉鍬・腸挟柳葉鍬は、鍬身の長身化・幅広化した後、細身化する流れを示している。前橋天神山例（図9-1）は、形態的な変化をあまりみせない小型重厚な形態の柳葉鍬として前期中頃に比定される。角淵軍配山古墳例（図9-8）や朝倉2号古墳例（図9-9・10）などは、長身・幅広化したものの好例で、その比率からすると、前期後半～末と考えてよい。さらに長身化・細身化する達磨山A・B号石室・十二天古墳（図9-15～19）などが、中期初頭～前半と考えられる。長瀨西古墳の二段逆刺柳葉鍬（図9-30）は、九州や近畿を中心に分布する鉄鍬であるが、関東で珍しい出土例で、逆刺の深さや長身化からすれば中期前半～中頃として良い。

圭頭鍬では、前橋天神山古墳例（図9-2）は、大型圭頭鍬の初現形態のもので、類例の一貴山銚子塚古墳や紫金山古墳例からすると、前期後半に比定される。定角系の鍬では、角淵軍配山古墳例（図9-11・12）が長

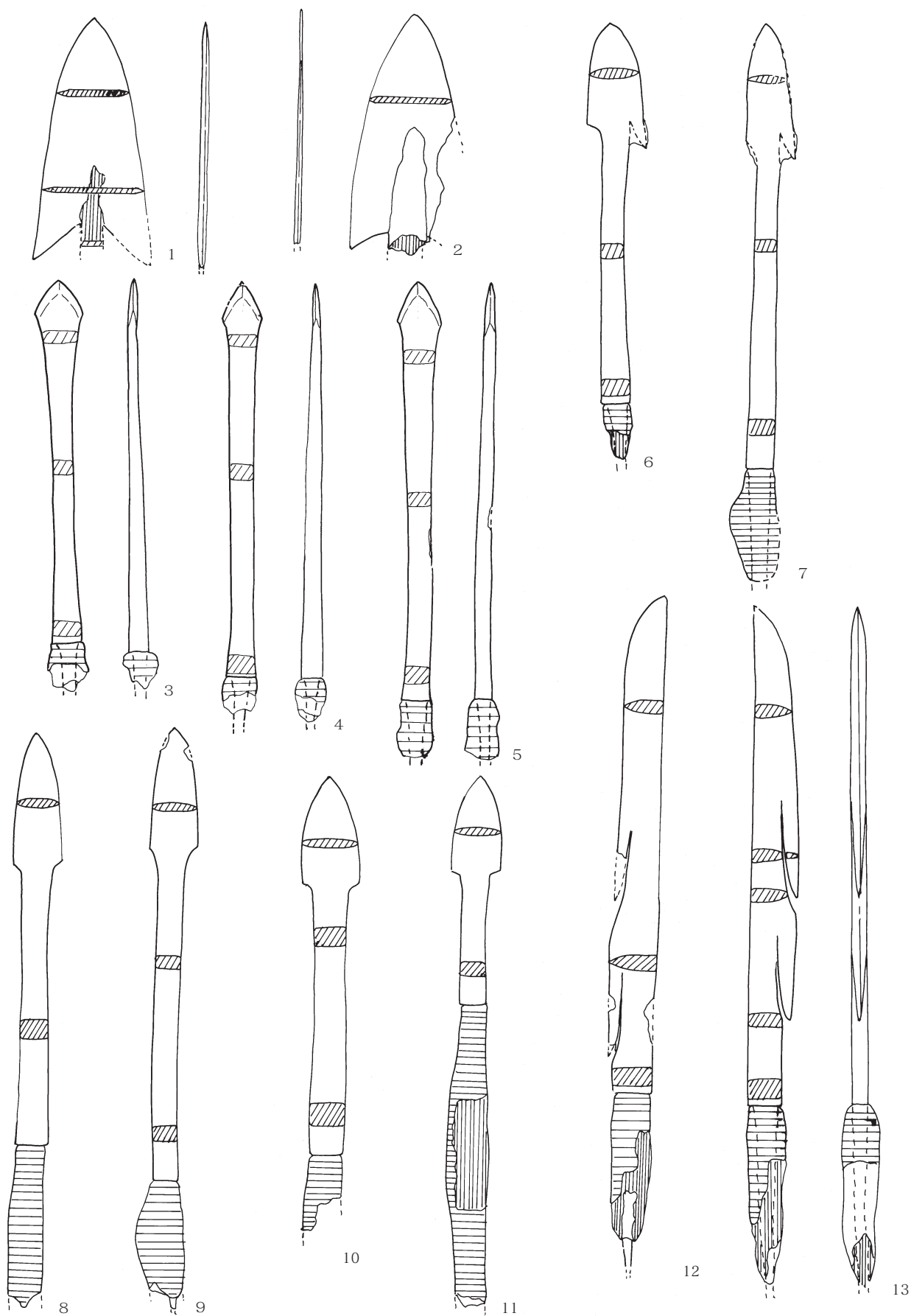


1～6 十二天古墳

7～9 蔵手塚古墳

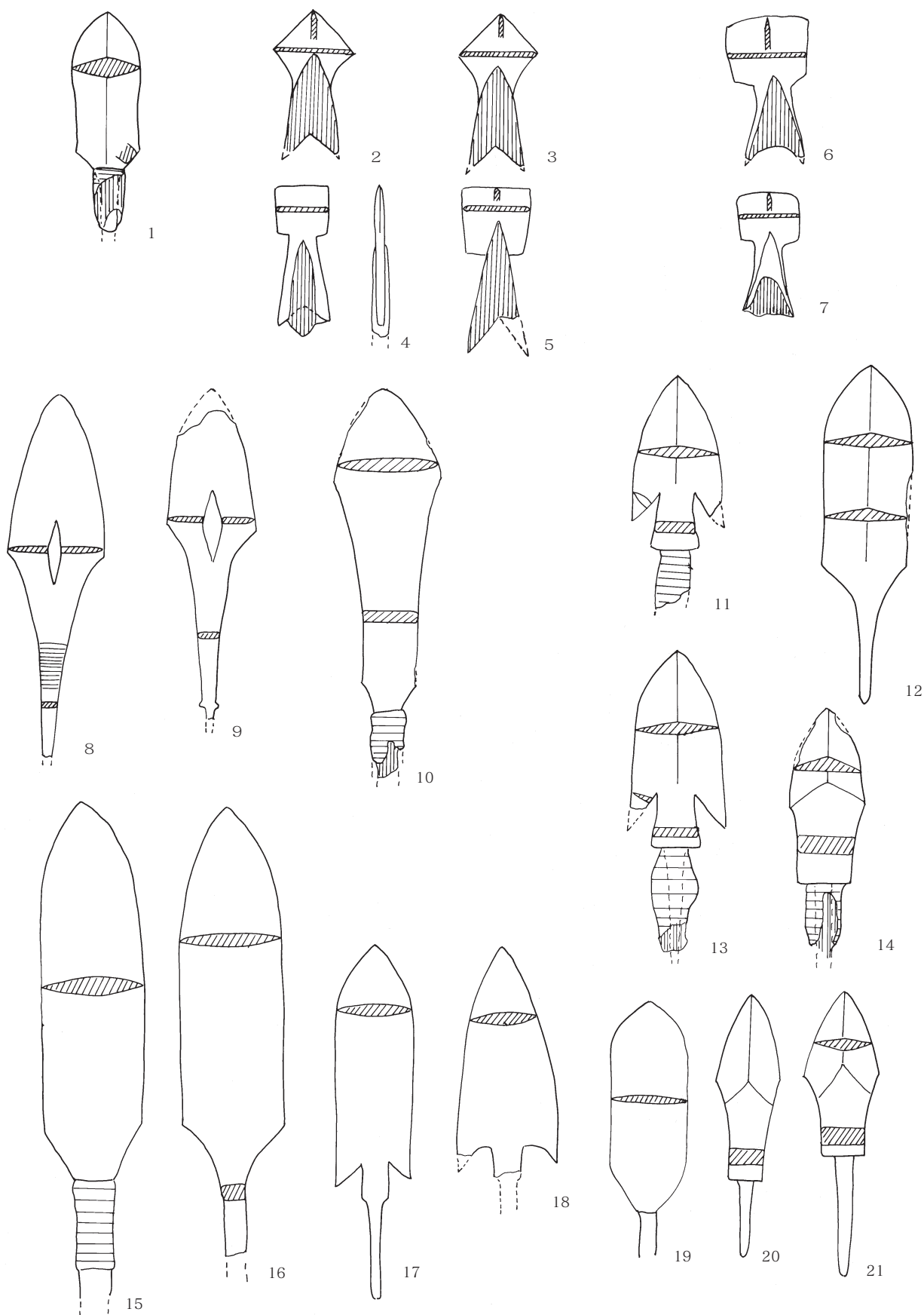
10～15 長瀧西古墳

図3 群馬県内古墳出土前・中期中頃の鉄鏃 (3) S=2/3



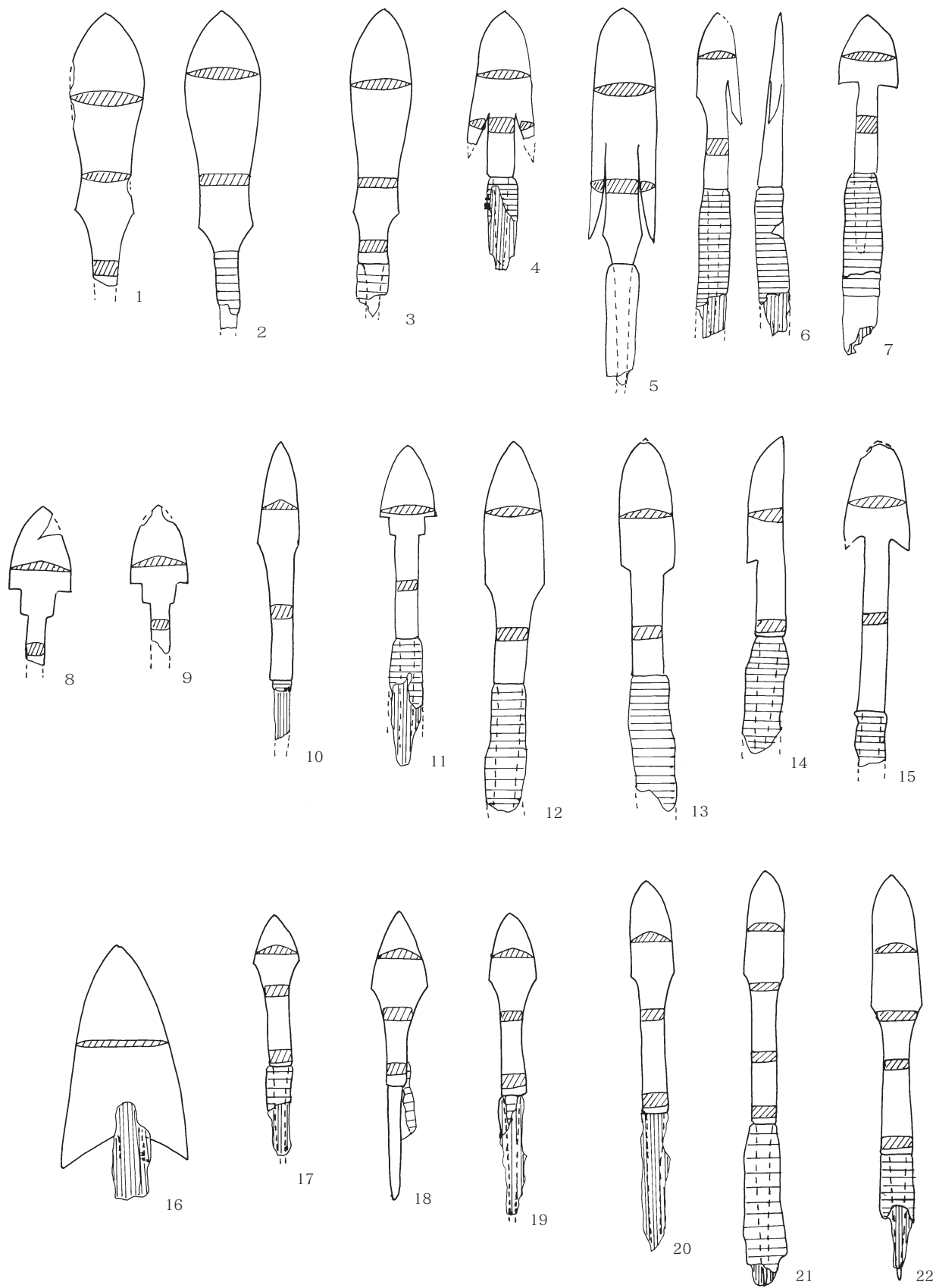
1~13 鶴山古墳

図4 群馬県内古墳出土前・中期中頃の鉄鏃(4) S=2/3

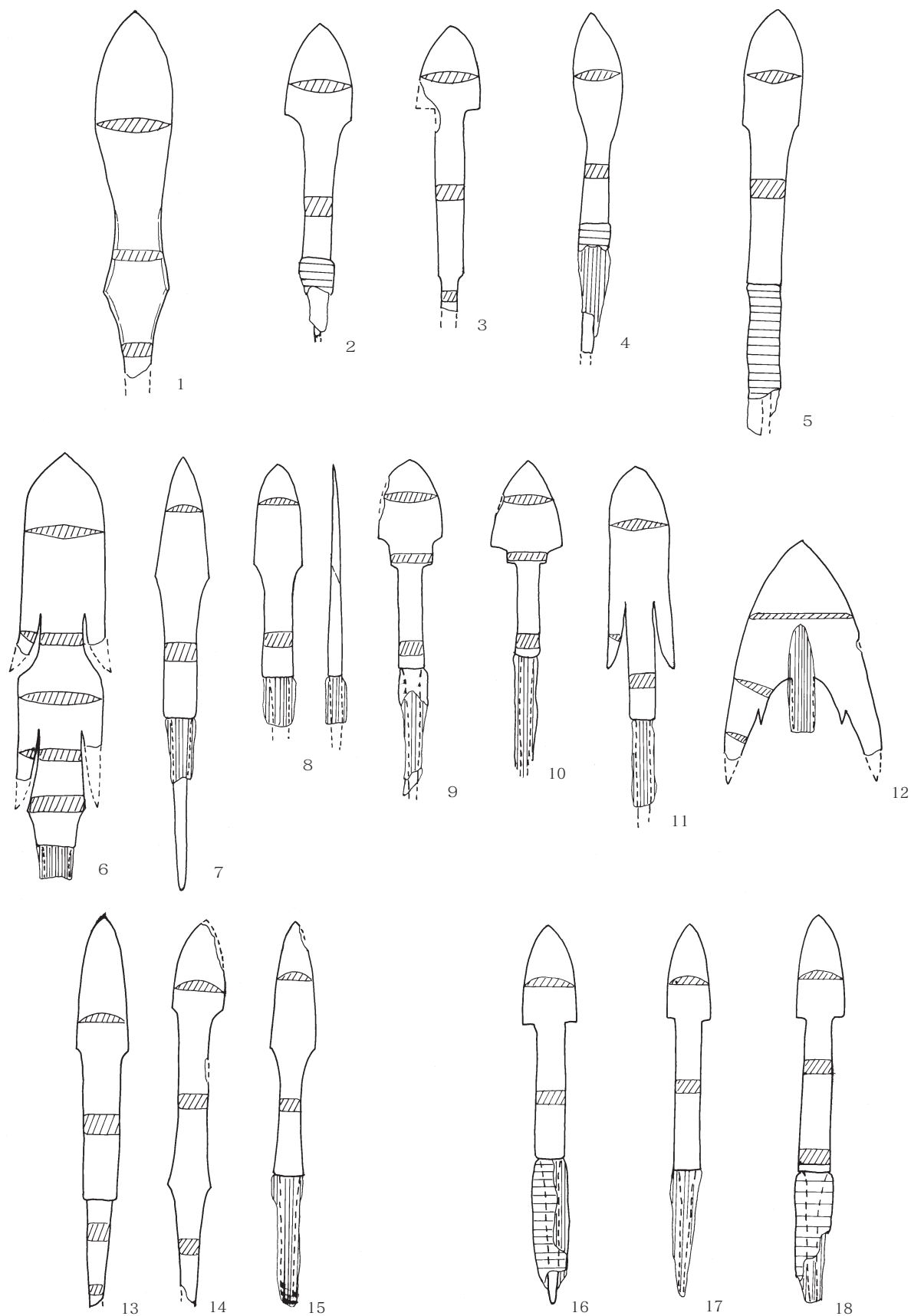


1 桜井茶臼山古墳 2～5 堂山古墳 6・7 東大寺山古墳 8・9 一貴山鈍子塚古墳 10 紫金山古墳
 11～14 三池平古墳 15・16 松林山古墳 17・18 池ノ内7号墳 19～21 櫛山古墳

図5 群馬県内出土鉄鏃と類似する鉄鏃 (1) S=2/3



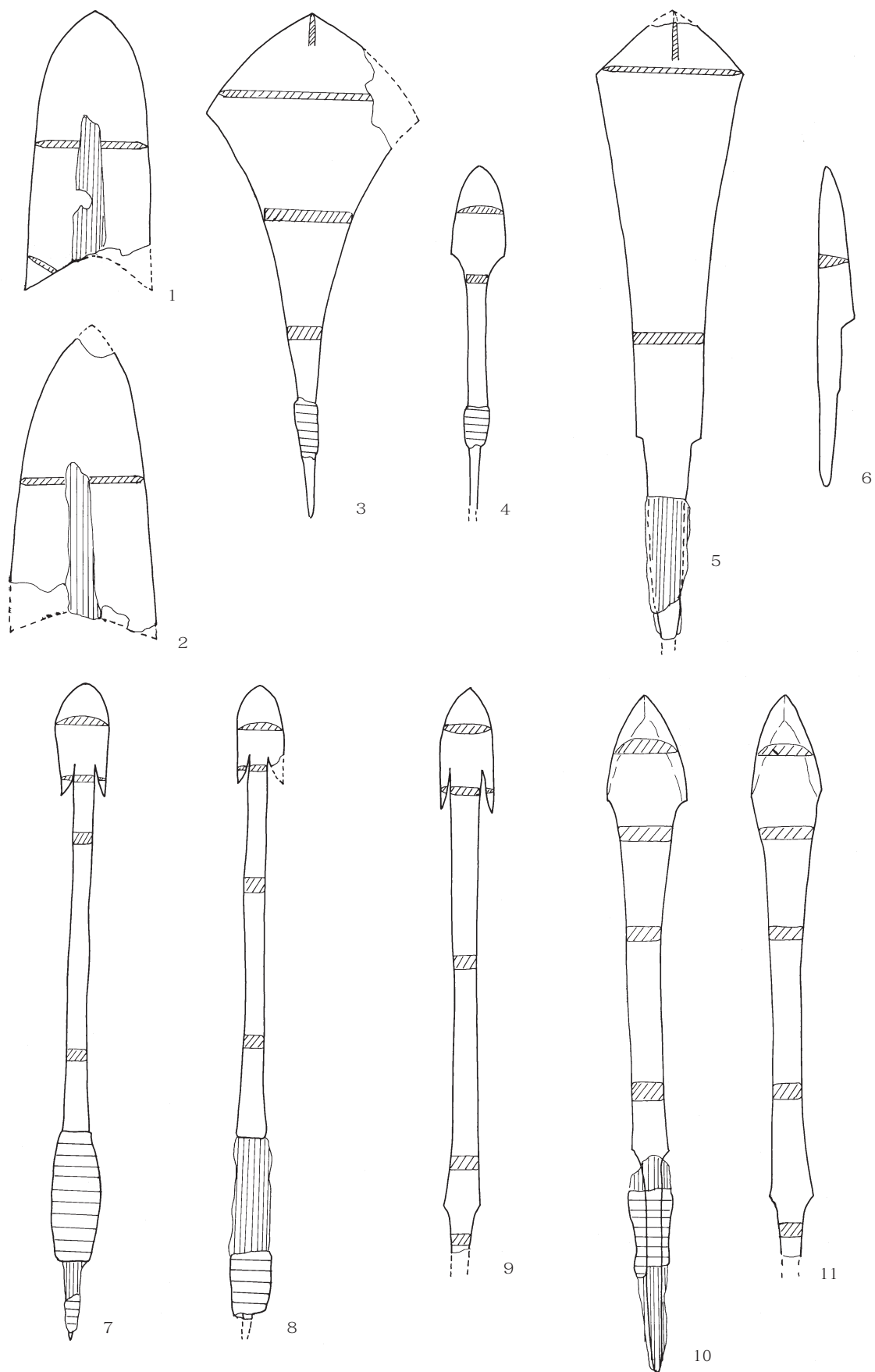
1 斑鳩大塚古墳 2 黄金塚古墳東部 3~7 野毛大塚古墳第3主体部
8・9 安光寺2号古墳 10~15 堂山古墳 16~22 千人塚古墳



1～5 神明社上古墳
13～15 兵家6号墳

6～12 兵家12号墳
16～18 旗振台古墳

図7 群馬県内出土鉄鏃と類似する鉄鏃 (3) S=2/3



1・2 千葉金塚古墳 3・4 小川台1号墳 5・6 静岡金塚古墳
7・8 一時坂古墳 9 宮山古墳第3主体部 10・11 宮山古墳第2主体部

図8 群馬県内出土鉄鏃と類似する鉄鏃 (4) S=2/3

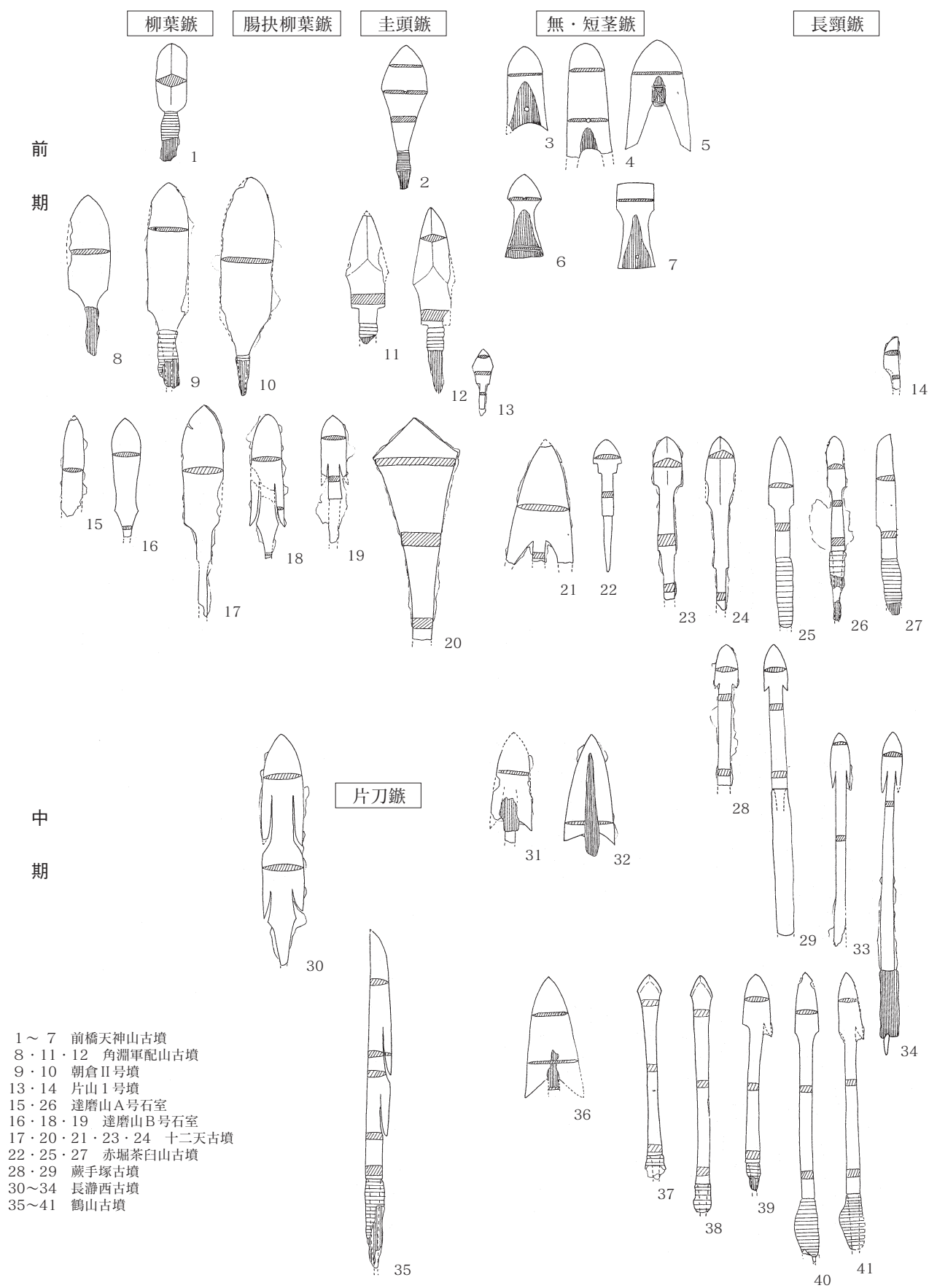


図9 群馬県内古墳出土鉄鏃編年図（前期～中期中頃）S=1/3

身化・大型化したものの代表例として考えられ、類例から前期後半～末と考えると良い。同じ定角系の鍬でも、小型扁平化している片山1号墳の鍬（図9-13）は、集落から出土する実用鍬かあるいは、雛形品と考えると良いものかと思われ、時期的には前期末～中期初頭と考えられる。十二天古墳の圭頭鍬（図9-20）は、九州地方に多い圭頭鍬の関東における貴重な例であり、類例としてあげた小川台1号墳・金塚古墳例からすれば中期前半と考えると良い。

無茎・短茎鍬は代表的な腸挟長三角形鍬（図9-3～5・21・31・32・36）が前期から中期にかけて連続して出土している。形態的には近似しているものであるが、時期が新しくなるとふくらが弱く、直線状に近くなる傾向がある（図9-21・31・32・36）。特徴的なのは、方頭・圭頭三角形鍬（図9-6・7）である。類例は東大寺山古墳や堂山古墳などで、前期後半に比定されるものである。

長頸鍬は、三角形・長三角形・腸挟長三角形・片刃・圭頭などがある（図9-14・22～29・33・34・37～41）。基本的に、短い頸部からだんだんと長頸化する流れを持つ短頸系の鍬と、初めから長頸化した完成された形で入ってくる長頸鍬の系統に分けられる。群馬でも両者出ており、前者の短頸系の鍬は片刃（図9-14・27）、三角形（図9-22・23）、長三角形（図9-24～26）、腸挟長三角形（図9-28・29）がある。時期が下るほど頸が長くなり、中期初頭から中期前半が中心である。後者の長頸系の鍬は、長三角形（図9-40）、腸挟長三角形（図9-33・34・39・41）、圭頭（図9-37・38）があり、頸部は基本的には7cm以上～11cmの長さを持っており、中期前半～中頃から散見し、中期後半から主流となる鍬である。

片刃鍬は、長身化・細身化する流れがあり、鶴山古墳例（図9-35）は、それらの片刃鍬の最終段階に比定される中期中頃として良い。

以上の各鍬群の編年からすると、その組み合わせで考えられる各古墳出土の鉄鍬の編年は以下の通りである。

前橋天神山古墳例は、柳葉鍬や圭頭・方頭三角形鍬から前期中頃～後半に比定される。

軍配山古墳例は、圭頭系の定角鍬の幅広・長身化と柳葉鍬の幅広化から、前期後半～末と考えると良い。

朝倉Ⅱ号墳例は、柳葉の長身化・幅広化から、軍配山古墳と同時期か少し後の時期と考えられる。

片山1号墳例は、あまり類例の無い片刃鍬であるが、前期末～中期初頭として良い。

達磨山古墳A号・B号石室例以降は、長頸鍬の系統が出現後の鍬群で中期に入るものと考えて良いと思われる。達磨山古墳例は、長頸鍬系の中でも頸がやや短い短頸鍬が中心で、中期初頭～前半と考えると良い。

赤堀茶臼山古墳例も長頸鍬系の中でも頸がやや短い短頸鍬が中心で、やはり中期初頭～前半と考えると良い。

十二天古墳例も同じように頸の短めの長頸鍬と長身化した柳葉鍬の存在から同じように中期初頭～前半と考えると良いであろう。

蕨手塚古墳例は、達磨山古墳例や赤堀茶臼山古墳例に比べて、やや頸部が長くなった長頸鍬が出土しているので、中期前半と考えると良い。

長瀨西古墳例は、二段逆刺柳葉鍬の存在と、頸が段々と延びていく系統の短頸系の長頸鍬と異なる、完全に頸が発達した腸挟長三角形鍬の初現の時期とみて、中期前半中頃に比定できるであろう。

鶴山古墳例は、圭頭の長頸鍬や、片刃二段逆刺鍬などから中期前半～中頃と考えると良いであろう。

4. まとめ

以上、今回は古墳時代の古墳出土の前期～中期中頃の鍬を取り扱い、県内の古墳出土の鉄鍬の編年を提示した。しかし、古墳以外の集落等出土の鍬については、記述できず、また完成された長頸鍬が主軸となる中期後半以降については膨大な資料群があるため、今回は取り扱わなかった。今後、後期・終末期の膨大な資料を分類整理して、その編年と特に地域性について取り上げていきたい。

なお、本稿は、平成22年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究活動指定研究による研究成果の一部である。

以下の機関・個人にお世話になりました。記して感謝いたします。（敬称略）

群馬県立歴史博物館・群馬大学・東京国立博物館・藤森健太郎・古谷毅

引用参考文献（図版については頁数の関係で省略した）

- 尾崎喜左雄 1951 『無名墳仮称達磨山古墳発掘報告』 群馬大学尾崎研究室
 尾崎喜左雄 1951 『太田市鶴山古墳発掘概報』 群馬大学尾崎研究室
 尾崎喜左雄 1953 『蕨手塚（仮称）古墳発掘調査報告書』 群馬大学尾崎研究室
 尾崎喜左雄 1981 『蕨手塚古墳』『群馬県史』資料編3古墳 群馬県
 尾崎喜左雄 1981 『達磨山古墳』『群馬県史』資料編3古墳 群馬県
 黒田晃 2005 『長瀨西古墳』『高崎市史』資料編2 高崎市
 後藤守一 1932 『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』 皇室博物館
 後藤守一 1937 『上野国佐波郡玉村町大字角淵軍配山古墳』『上野国碓氷郡八幡村大字剣崎字長瀨西古墳』『古墳発掘品調査報告』 東京帝室博物館
 志村哲 1989 「十二天塚古墳の築造年代について」『群馬県史研究』29号 群馬県
 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鍬について」『榎原考古学研究所論集』8 奈良県立榎原考古学研究所
 杉山秀宏 1995 「群馬県出土の鉄鍬について」『群馬県内出土の武器・武具』群馬県古墳時代研究会
 杉山秀宏 2008 「両鎚造柳葉式鉄鍬について～群馬県内の資料を中心に～」『成塚向山古墳群』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
 松島榮治 1968 『前橋天神山古墳調査外報』群馬大学史学研究室
 前橋市教育委員会 1970 『前橋市天神山古墳図録』前橋市教育委員会
 松島榮治 1981 『前橋天神山古墳』『群馬県史』資料編3 群馬県
 右島和夫 1989 『鶴山古墳出土遺物の基礎調査IV』『群馬県立歴史博物館調査報告書』第5号群馬県立歴史博物館
 茂木由行・橋本博文 2004 『片山遺跡群発掘調査報告書』吉井町教委
 山本良知 1953 『朝倉Ⅱ号古墳発掘調査概報』群馬大学尾崎研究室
 山本良知 1981 『朝倉Ⅱ号古墳』『群馬県史』資料編3古墳